

自然林の杉

清太郎さんの森に学ぶ

秋田市在住の佐藤清太郎さんは、広葉樹の自然林に杉を植林するというユニークな林業を営む。広葉樹は、夏場に日光を遮り乾燥と暑さから杉を守る。冬場には落葉して暖かな日差しが杉の成長を助ける。杉の一斉造林（純林）では、良質な木材を得るため、成長にしたがい一定の割合での「間引き」が欠かせず莫大な経費がかかる。しかしこの方法だと、一定の間隔をおいて植林するため「間引き」は不要である。その上、多種類の広葉樹が根を張り、それが互いに絡み合うので台風の影響を受けにくい。私はこの森のことをNHKの放送で知りいろいろと考えさせられた。県北の山間に車を走らせると、いまだ累々たる倒木が目立つ。一昨年の台風の爪痕である。清太郎さんの方法だとこれほどの被害はなかったはずだ。

こう考えたとき純林は、どこか現代日本の盲点を指摘しているように思える。温暖化のせいか過去に経験したことがないような大風、豪雨、高温を私たちは経験しつつある。同様に学校の教師も、二〇年・三〇年の間に蓄積した経験知では越えられぬ課題に直面している。こんなとき私たちは、この指摘や清太郎さんの知恵から学ぶべきではないかと思われる。杖塾では「教職員よりずグループ相談」を行っているが、これは教師ばかりの自助グループでありどこか純林と似ているのかもしれない。その欠点も予想して、これとは別に様々な職種の人が混在するグループづくりも行っている。「教師グループだからこそ話せることもある」との想いから私は前者を立ち上げたのだが、教員グループの関係が円熟すれば、その次は自然林グループ化を目指したいところである。

自然林は様々な個性をもつ樹木の宝庫であり、様々な生き物の宝庫でもある。人類はその生命力溢れる森を破壊し純林を育ててきた。一見知恵があるように見えるこの歴史は、まさに小賢しい道ではなかったのか。この変化は集団の歴史変化にも見受けられ、コミュニティという自然林が廃れ、能率や機能を優先する集団が激増した。しかしこの新集団は他集団との競争力はあっても杉の純林と同様の欠陥を免れない。したがって今は、競争力の重視か、人間集団としての生命力の重視かの岐路に立たされていると言えらるだろう。

「問題児は教室の宝」の言葉は教師なら誰でも知る言葉である。同じことは教師にも当てはまるはず。今の時代に行き詰まる教師の語る言葉は、学校教育の盲点に気づくには十分過ぎるほどの力を持つ。私たちはこの力を宝にできるか否かの岐路にも立たされているのではないか。少なくとも繊細な心の持ち主ゆえに傷つき、休職に追い詰められる教師を「弱い人間」として排除する社会であってはならない。いまこそ生命に溢れた自然林の杉を範とする教育環境づくりが問われているのではないか。

五月三日、毛無山から白馬山に至る尾根を縦走した。尾根に咲くかたくりが美しく、ブナ林の新緑も目に染みた。そして清太郎さんの森に似た自然林から受ける懐かしさのせいか、ついつい教育の現状と未来に思いを馳せている私であった。

沢田の杖塾 主宰 森 口 章

